



シリーズ

第100回

人権

子育てを通して私が実践していること

私は3歳と1歳の2児の父親です。私が父親になって間もない頃、家族で実家に帰省した時の出来事です。母に「育児しているの?」と聞かれ私は「しているよ」と答えました。すると、母は「偉いなー。今の男の人は育児もこなすんだって」と言い、「自分の子どもだから育児するのは当たり前やん」と私は返しました。子どもの頃は父より母と過ごす時間が圧倒的に長かった記憶があったので、母に自分を育てていた頃のことを聞きました。すると「私が子育てをしていた頃は、おそらく世間一般的には、男は仕事、女は家事・育児だった気がしたし、私の友達の家もほとんどそうだったよ。あと私は世間とは関係なく、全部自分でするのが夢だったから、別に男の人にしてもらおうとは思っていなかったし、おかげで自分の好きなように子育て出来たから良かったよ」と答えました。

このような家庭環境だったことから、長男が生まれる前の私は、「女は家事・育児」という考え方を持っていました。しかし、長男が生まれ、実際に育児に関わることで子育ての大変さを知りました。私にとって子育てをする中で一番大変なことは看病で、長男が風邪や感染症にかかる度に次男にうつり、2人同時に看病しなければならないことがあります。妻一人で看病することがつらそうな時には、職場環境に恵まれていることもあり私も休みを取り、病院の付き添いや看病をし、2人で子育てに向き合っています。一日看病することがいかに大変かを知りました。

このように子育てに関わることで、日々の子どもの成長に気付けるようになりました。そして、私にも家族を守るという気持ちが芽生え、家族を第一に考えるようになり、家庭を持てば仕事と家事・育児を両立しなければならないと思えるようになりました。妻は育児休業中ですが、あと1年半で職場復帰となります。一番大変な時期は今ではなく、育児休業明けだと思います。そのために妻と話をし、お互いが仕事と両立出来るように調整しています。私は職場復帰した妻と私が共に家事・育児をしていけるよう、自ら何が出来るのか考え、分らないことがあれば妻と相談しながら一つずつこなして、より一層、家事・育児に携わっていきたいと思います。このような姿を子どもたちに見せて「男は仕事、女は家庭」という性別による固定的役割分担意識を持たせないようにすることが私の責務だと思いました。

男女共同参画社会基本法が施行され、20年以上が経とうとしています。近年の女性の社会進出は著しく、「男は仕事、女は家庭」はもう時代遅れの概念だと言われています。しかし、実際に自分自身もそうでしたが、未だにこのような固定概念にとらわれている人がいると思います。これからは、「仕事と生活の両立」つまり、ワーク・ライフ・バランスの時代です。その中で、パートナー同士が協力・尊重し合い、仕事と家事・育児の両立が出来る社会が世の中に広がっていけば良いと思います。

(20代 男性)